



大谷大学  
地域連携室  
事業報告書

2019



# はじめに

大谷大学は近年「Be Real 一寄りそう知性」を、教育の大切な理念を示す言葉として掲げています。「Be Real」は難しい言葉ですが、一言で言えば、自分と他者（社会）に誠実に向き合う態度を意味します。そして「寄りそう知性」は、異なる他者と敬い合いながら生きる道を求める知性を意味します。地域連携室での活動は、このような大学の精神を最もよく象徴する教育のプログラムであると考えます。

大谷大学で地域連携室が開設されて以来、さまざまな地域連携プロジェクトが実施され、多くの学生達が学びを深めてくれています。私も年度毎の区切りに学生たちの学びの様子を報告を受けますが、地域へ飛び込み、試行錯誤しながらの学修活動を通して、地域の方々の多大なご協力を頂きながら学生たちが様々な経験を重ねて大きく成長したことを実感いたしております。

地域連携プロジェクトへの参加をきっかけに、学生たちが学内での諸活動をよりいっそう充実させている様子を目の当たりにすることも多くあります。学生たちの潜在的なチカラが地域の中での様々な活動によって開花したのだなど、頼もしく感じています。多様な人々との刺激的な交わりが、学生たちを育てていただいたのだと思います。

地域の方々には、数々のご迷惑もおかけしたことと思います。しかし多くのご協力のなかで、未来を担う若い学生たちの学びは確実に深まっていることでしょう。地域活動の中での育ち合う経験は、今後の学生

たちの人生にとって大きな意味を持つものと確信します。共に「寄りそう知性」を磨くため、地域の皆さんには引き続きのご理解とご協力を、宜しくお願いいたします。



大谷大学  
学長 木越 康

## もくじ

- 地域連携室について・・・1
- 2019年度の取り組み・・・2
- 2019年度プロジェクトレポート・・・3
- 中川区の暮らし再発見プロジェクト・・・4
- コミュニティメディアプロジェクト・・・6
- まちの居場所プロジェクト・・・8
- 祇園祭ごみゼロ大作戦プロジェクト・・・10
- 聞き取りを通じた多世代交流と社会調査・・・12
- 子ども・子育て支援プロジェクト・・・14

大谷大学地域連携室では教育の一環として進められる様々な地域連携事業のバックアップを担い、研究教育と地域との協働を積極的に進められるよう、支援を行っております。

今年度の活動状況を振り返りますと、地球環境をテーマにしたプロジェクト、協定締結とそれに基づく子どもによるまちづくりの活動支援など、新たな取り組みをスタートすることができました。また、これまで進めてきたプロジェクトにおいても、社会福祉施設や地域の団体、他大学との共同による子どもと高齢者の居場所づくりや商品開発など、さらなる広がりや深まりがあったのではないかと感じております。

あらためて1年を終え、地域連携、情報発信、町おこし事業、文化・子育て活動の共同、環境活動など、プログラムの数や内容は確実に前進し、関係する地域や団体、参加する学生の数とその関わる内容の質など、共に充実してきていると感じています。これもひとえに、暖かく見守って頂いた協力機関や団体、住民の皆様のおかげと感謝しています。本報告書の発行をもってこの1年の歩みの振り返りとするとともに、共に歩んでいただいた皆様への心よりのお礼とさせていただきますと存じます。

今後も現実に真摯に向き合い学び真理を探究する



「Be Real 一よりそう知性」を基本に、自らの役割を自覚し積極的に関わる姿勢を大切にしつつプロジェクトを進めていきたいと考えております。引き続きのご指導、よろしくお願い致します。

地域連携室  
室長 志藤 修史

- 駅ナカアート2019・・・16
- 網野町海浜漂着プラスチックの調査・清掃活動・・・18
- 伝記作成プロジェクト・・・20
- 南丹市美山町平屋地区と学生との交流活動・・・21
- 京都府北部福祉フィールドワーク・・・22
- ニコニコ北っ子「北区こどものまち」・・・23
- 学まち連携大学促進事業に関する取り組み・・・24
- 情報発信・お問い合わせ・・・25

# 地域連携室について

大谷大学では、地域連携・フィールドワークの取り組みを強化し、「学生が地域と接点を持ち、地域での活動への積極的な参加を通じて学習し成長」する能動的学習(アクティブラーニング)をコンセプトとした学びの充実を目指し、2015年度に、実際に地域での活動を通じて、地域社会の課題について調べ、地域や各機関の皆さんとともに考え、アクションを起こしていく活動「プロジェクト」をサポートする拠点として「コミュ・ラボ」を開設しました。

主に「地域連携プロジェクト」の企画・実施をサポートすること、「地域連携プロジェクト」間の交流を推進すること、プロジェクトの成果を学内外に発信することを業務としています。地域と大学の相互交流の窓口となりつつ、大学教員や学生がその立場ならではの地域貢献をするなかで、学びを深めていけるようサポートしています。

## 年次事業報告書のご紹介



【2015年度 2016年5月発行】



【2016年度 2017年7月発行】



【2017年度 2018年7月発行】



【2018年度 2019年4月発行】

地域連携室では年度毎の取組みを事業報告書としてまとめ、発行しています。

2018年度以前の取組みについては、これらをご参照ください。過去の年次事業報告書は、地域連携室の窓口で閲覧いただくことができます。

数に限りがございますが、ご提供することが可能です。また、地域連携室のWebサイトからPDFデータでダウンロードすることもできます。詳細は地域連携室までお尋ねください。

これまでの年次事業報告書は右のQRコードからもアクセスいただけます。



詳しくはp.25をご覧ください。

## 地域連携の窓口

地域の皆さまからの地域連携に関するお問合せ・ご意見・ご相談に関する窓口としてお話を伺っています。お気づきの点やご提案などございましたら、地域連携室までご連絡をお待ちしています。



詳しくはp.25をご覧ください。

# 2019年度の取組み

## (1) 京都府京丹後市網野町での「海浜漂着プラスチックの調査・清掃活動プロジェクト」の開始(2019.9.1~7)

新たなプロジェクトとして、京都府京丹後市網野町での「海浜漂着プラスチックの調査・清掃活動プロジェクト」(担当:鈴木寿志教授)がスタートしました。近年注目が集まっている、海浜砂中・海中浮遊・魚内臓中のマイクロプラスチックや、海浜漂着ゴミを地元の方のご協力のもと調査する本プロジェクトは、メディアでもその様子が取り上げられました。学生による清掃や調査結果の地域還元によって、地域環境問題の改善に寄与することが期待されるプロジェクトです。



p.18に関連記事がございます

## (2) 地域連携プロジェクト報告会の開催(2019.10.30)

本報告書でご紹介する各地域連携プロジェクトに参加する学生同士の交流と研鑽を目的に、合同の報告・交流会を年に一度行っています。他の活動を知り、活動する中で感じた課題ややりがいを、他のプロジェクトの学生や、プロジェクトに参加したばかりの後輩に伝え共有することで、学生のまなびと成長につなげています。



## (3) 「京都・中川まんまびーア!」の発売開始(2020.2.13)

「中川の暮らし再発見プロジェクト」(担当:志藤修史教授・野村実助教)の学生が収穫した、京都市北区中川区のお茶「まんま茶」を使用したクラフトビール「京都・中川 まんまびーア!」が発売されました。お茶ゆかりの梅尾・高山寺近くの中川区の里山の斜面で、昔からのDNAのまま受け継がれ育てられてきた茶葉を学生が収穫し、本学OBの松尾浩久氏が理事長を務め、福祉事業としてクラフトビールを醸造するNPO法人「HEROES」がビールに商品化。売り上げの一部を中川での学生による地域福祉・健康増進活動に役立てます。








p.41に関連記事がございます








# 2019年度 プロジェクトレポート

### 凡例

-  主な活動場所
-  2019年度の活動期間
-  科目名(正課の場合のみ)
-  指導教員
-  参加学生について

参加者のコメントにある学生の学年は、2020年3月現在のものです。

# 中川学区の暮らし再発見プロジェクト

-  京都市北区中川学区
-  2019年4月～2020年3月
-  文学部社会学科地域政策学コース専門科目  
社会学部コミュニティデザイン学科専門科目
-  志藤修史・野村実
-  文学部社会学科  
3年生・4年生 11人  
社会学部コミュニティデザイン学科  
1年生・2年生 27人



## プロジェクト概要

本プロジェクトは、2015年度から中川社会福祉協議会との連携事業として、「北区民まちづくり提案支援事業」の助成を受けて実施しています。「地域の人々が日々の暮らしの中で感じている困りごとは何だろうか?」「暮らしの不安を少しでも解消、解決できる方法はないのだろうか?」という中川社会福祉協議会のみなさんの地域への思いから、「中川学区での暮らしの実態調査」を始めることになりました。

中川学区は京都市北部の山間地域に位置し、中川・杉阪・真弓という3つの地区があり、古くから林業で栄えてきた町です。しかし今では、住宅の様式が変化し、中心だった林業は衰退しています。少子高齢化が進み、商店金融などは撤退。最寄りの病院やスーパーまでは車で20分以上かかる状況になっています。公共交通機関であるバスは1時間に1本程度。自家用車中心の生活によって、人によっては外出が困難な状況となっています。このように、一見すると「暮らしにくい

は大変そう…」と捉えがちですが、決して大変なだけではなく、そこにはかけがえのない地域の人たちが紡いできた自然の風土や文化、地域行事などへの思いなど、これまで作りあげてきた歴史や暮らしがあります。

本学では、このプロジェクトを通して、地域に暮らす人々の思いを大切に、地域の抱えている課題や、地域のこれからのことを共に考えていきたいと思っています。また、地域に残る伝統や文化の積極的な発信や、地域の資源を活用した新たな生活文化を創造するきっかけづくりなどにも取り組んでいきたいと思って活動をしています。山間の地域での暮らしのお話は初めて聞くことも多く、驚くこともたくさんあります。何度も地域を訪ね、お話を伺い、さまざまな活動を共有する中で、暮らしを知り、そしてともに考えるという経験につながっていると感じています。



## 活動内容と成果

2015年度から始まった本プロジェクトでは、地域の人たちとの交流活動や、暮らしの実態調査を実施してきました。2019年度は、中川地区の地域の方との交流を目的としたサロン「and house.」の企画・運営、地域の清掃活動、学区の夏祭りに参加しました。また、中川で飲まれてきた昔ながらのお茶の栽培、お茶づくりなどに取り組み、福祉事業所 NPO 法人 HEROES との連携により、お茶を使ったビール「京都・中川まんまピーア!」の開発・製造に取り組みました。また、学生が活動時に撮影した移し動画や写真を「中川写真展」として学園祭などで掲示したほか、FacebookやInstagramなどのSNSを活用し、中川を知ってもらい催しや情報発信をしました。地域のみなさんからは様々な場面で、地域の歴史や文化、仕事や暮らしについてお話を伺い、交流を深めたりしています。何気ない会話の中にある地域への思い、暮らしの中の困りごとによりしっかりと耳を傾ける活動でありたいと考え、日々の活動に取り組んでいます。

活動の様子は「中川学区の暮らし再発見プロジェクト活動記録集 Vol.5」として冊子にまとめています。閲覧を希望される方は、地域連携室までお問い合わせください。

活動報告は **instagram**  
**#otaniandhouse** で発信中!



## 参加者コメント

今年度は学園祭で模擬店を出店するなど、中川での活動をより多くの人に認知して頂くための挑戦ができた1年でした。来年度以降も、先輩達が築き上げてきた地域の方々との信頼関係を引き継ぐとともに、より多くの新しい挑戦ができればと思います。



社会学部  
コミュニティデザイン学科  
2年生 松岡 晃平

## 参加者コメント

中川に関する活動は今まで行われてきたサロン活動等に加え、まんま茶を使った「まんまピーア!」によるPRも始まりました。より一層活発になった学生参加での経験は、この活動でしか学べないことばかりです。温かく迎えてくださる地域の方々喜んでもらえるように、これからも調査や活動を続けていきたいと思っています。



社会学部  
コミュニティデザイン学科  
1年生 井上 詩菜


# コミュニティ メディア プロジェクト


## プロジェクト概要


3学年の合同の演習として、大学のある北区北大路エリアの情報発信をテーマとしたプロジェクトを行いました。

北大路エリアは、京都市内中心部の京都駅や烏丸、河原町エリアに比べてタウン情報誌などのメディア掲載もありません。また北区には上賀茂神社、金閣寺などもあり周辺地域の情報は旅行雑誌などでも取り上げられていますが、北大路駅周辺は掲載が少ないというのが現状です。こうしたなか、学生が地域に密着した情報を取材し、発信に取り組むのがこのプロジェクトです。メインの対象層は、この地域で暮らす、働く、学ぶ若い世代です。この地域での生活歴が少なく、地域の情報を求めている層にインターネット等を通じて情報を届け、人やお店とのつながりづくりを促します。


2016年からはコミュニティラジオ局にて毎週1回の50分番組を放送。2019年も継続して取り組んでいます。また、2017年8月に開

 京都市北区北大路エリア

 2019年4月～2020年3月

 文学部社会科学部地域政策学コース専門科目  
社会学部コミュニティデザイン学科専門科目

 赤澤清孝

 文学部社会科学部  
3年生 27人  
社会学部コミュニティデザイン学科  
2年生16人・1年生20人

設した地域情報サイト「キタキタ!」も継続して制作。この他、情報誌「キタキタ!」の第3号を制作しました。

これらの取り組みを通じて、学生が地域に埋もれていた面白いお店やイベント情報を知ること、地域の人の暮らしや仕事の面白さ、大変さなどを知ること、また、パソコンを使っての情報発信スキルや、対人コミュニケーションのスキル向上を図ることを目指しています。

 p.25に関連記事がございます



## 活動内容と成果

ラジオ番組「大谷大学ハッピーアワー!」を毎週木曜日19時に放送。約50回放送し、地域の商店主やNPOスタッフなど多数の方にゲストとして登場いただきました。番組開始から3周年記念の会には北区長にも出演いただきました。また、地域情報サイト「キタキタ!」では、「地域のニュース」「イベント情報」「グルメ」「ショッピング」「お出かけスポット」「まちづくり」などをテーマにまちに出て取材を行い、情報を発信。約50件の記事を発信しました。情報誌「キタキタ!」第3号では、北区の経営者6名へのインタビューを行い、ビジネスの場としての北区の特徴を伝えました。また、古くからの地域の魅力を紹介するコーナーとして、元町学区、紫竹学区の和菓子店を紹介しました。これらの取り組みを通じ、学生たちと、地域の面白い若者、大人とのつながりが生まれた他、地域の人たちの様々な生き方、働き方に刺激を受けています。

また、学生たちは、番組や情報誌づくりなどに必要な企画力、チーム運営に必要なマネジメント能力を身に付け、ラジオ放送や取材を円滑に進める会話力（コミュニケーション能力）も身につけることができました。

## 参加者コメント

こんなに珍しい活動があるのか!と思ひ飛び込んでみたラジオ放送の活動ですが、様々な職業や年齢のゲストとのお話は色々な価値観に触れられ、とても勉強になりました。今後も「楽しくトークすること」を大切に生放送していきたいと思いま



社会学部  
コミュニティデザイン学科  
2年生 古澤友里恵


## 参加者コメント


ウェブサイトづくりのための取材や原稿執筆を通じて、相手が言いたいことを正確に汲み取ることの大切さを学びました。これは社会に出てからも必要なことだと思うので、今後の人生に活かしていきたいです。





文学部  
社会学科  
3年生 杉本翔哉


# まちの居場所プロジェクト

 京都市北区

 2019年4月～2020年3月

 文学部社会学科地域政策学コース専門科目  
社会学部コミュニティデザイン学科  
地域政策学コース専門科目

 大原ゆい・西村雄郎

 文学部社会学科  
3年生 9人  
社会学部コミュニティデザイン学科  
2年生7人、1年生11人

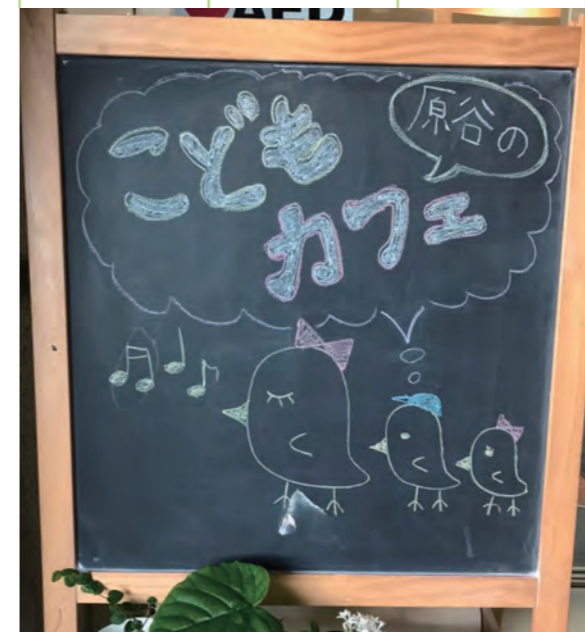


## プロジェクト概要

まちの居場所づくりプロジェクトは地域の社会福祉施設の皆さんと協働しながら、地域の居場所づくりを進めています。いま地域福祉実践の場面では、「地域共生社会」がひとつのキーワードとなっています。そして、多様な背景を持つ人々が関係を紡ぐ「居場所」づくりも盛んに取り組まれています。ここで目指されるのは地域に暮らす誰もが、ともにケアしあいながら、気づきあいながら生きる社会です。

どのような状況にあっても、住みなれた地域で、自分らしく暮らし続けるためには、保健、医療、介護のサービスだけではなく「居場所」や「つながり」の活動が必要となるのではないかと考えます。そしてこれは誰か特別な人に限ったことではなく、子どもも大人も、障害のある人も、ない人も、地域に暮らすすべての人にとって「あったらいいな」と言える場所・活動なのではないでしょうか。

そこで、このプロジェクトでは、住民団体や地域を支える専門機関、大学とが連携をして、学区で暮らす誰もが参加できる「場」と「活動」をつくり、地域やまちづくりに貢献することを目指しています。この活動を通じて、地域で今後さらに大切になってくると考えられる「人と人とのつながり」や、さまざまな立場におかれた人の「居場所」の今日的なあり方について実践を通じて考えていきたいと思っています。



## 活動内容と成果

2019年度は、社会福祉法人七野会の皆さん、京都市北区金閣学区の皆さんと一緒に「原谷の子どもカフェ」事業に取り組みました。これは、金閣学区原谷地区で毎月第1水曜日に行われている子ども食堂プロジェクトです。日頃は高齢者への福祉サービスを提供する七野会が子どもカフェの場を提供し、障害者就労支援事業に取り組むカフェレストラン空思都と地域の金閣福祉会の皆さんが食事を提供し運営されています。このプロジェクトでは、子どもたちと一緒に宿題をやったり、卓球で遊んだり、食事をともしたりしながら、地域の「居場所」がどのような人によって、どのようなプロセスで作られていくのかを学んでいます。さらに、原谷の子どもカフェに参加するなかで、「子どもたちはどんな理由でカフェに参加しているんだろう?」「今よりもっと楽しい場にするためには何が必要だろう?」「子どもたちの声をもっと子どもカフェに反映させたい!」という思いから、参加する子どもたちを対象にしたアンケート調査も実施しました。これらの集計・分析は来年度の課題ですが、分析結果をもとに子どもカフェのプログラムづくりにも関わっていきたくと思っています。



## 参加者コメント

1年を通して、課題図書の前読、北陸地域の居場所調査、子ども食堂等の活動を行いました。このような取り組みを通して、調査を行う上で大切な事がわかりました。それは、フィールドワークだけでなく、前読をはじめとした事前学習の重要性です。これらのことを活かして、卒業論文にも取り組んでいきたいと思っています。



文学部  
社会学科  
3年生 寺生雄渡

## 参加者コメント

原谷子どもカフェでは笑い声や話し声が色々な所から聞こえてきて、明るい雰囲気があるところがあり、年齢関係なく仲良くしているのが感じとれました。また、子どもたちが帰った後はその日の振り返り、反省会が行われ、より良い環境を作ろうとするスタッフの皆さんの心意気に感動しました。



社会学部  
コミュニティデザイン学科  
2年生 佐久間航

# 祇園祭 ごみゼロ大作戦 プロジェクト


## プロジェクト概要


世界有数の伝統祭事である祇園祭。祭の山場となる山鉦巡行前の宵山行事期間中は、多くの夜店・屋台が四条烏丸を中心に広範囲で立ち並び、国内外から多くの来場者が訪れます。しかし、来場者数に比例して課題となるのが、紙やプラスチック容器などの廃棄物でした。以前に比べ散乱ごみなどは減ったものの、可燃ごみの量は増える一方でした。

そこで2014年、NPO、行政、夜店や屋台、ごみ収集事業者などの協力のもと、使い捨て食器を、繰り返し洗って使用可能なリユース食器に切り替える「祇園祭ごみゼロ大作戦」の活動が始まりました。この活動には、のべ2000人の市民がボランティアとして活動を支えています。大谷大学では、2015年より祇園祭ごみゼロ大作戦の活動に協賛し、また、全学を挙げてこの活動に参加しています。




 京都市中京区、下京区(祇園祭山鉦町)

 2019年4月～7月

 人間学Ⅱ-9(および有志による課外活動)

 赤澤清孝

 112人(1年生26人 2年生37人  
3年生36人 4年生8人 職員ほか5人)  
(人間学Ⅱ-9受講者34人、ボランティア78人)

参加は正課授業を受講し、その一環として参加、ボランティアとしての参加の2つの形態があります。授業では、祇園祭の歴史、ごみ問題、環境問題に関わる市民活動の実例など、多様な視点から「祇園祭ごみゼロ大作戦」の背景やこれまでの成果について学び、その上で宵々山・宵山当日の活動に参加し、リユース食器の回収やごみの分別を促しました。活動後は、その経験をレポートにまとめることで環境問題や、環境問題の解決に向けて取り組む市民活動への理解を広げるとともに、主催団体に活動の課題や改善点を提案し、次年度以降の活動につなげてもらうようフィードバックしました。

## 活動内容と成果

全学共通科目の人間学Ⅱの受講者は34人。今年は時間割の変更などもあり例年よりも少なめでしたが、ボランティアとして参加したものは78名と過去最高でした。参加者のうち5人は、活動の中心的な役割を果たすリーダー役を務めました。

当日は、学年・学科の異なる学生のほか、他大学の学生や社会人、高校生などと一緒に活動に参加。鉦町にお住まいの方や観光客からの感謝や励ましの声も多数いただきました。また、今年度も昨年度に続き、袖口に大谷大学の名称とロゴがプリントされた

ボランティアTシャツを着用。集合場所や、担当のエコステーションにおいて自然と相互に声かけや自己紹介が始まり、チームワークよく活動できました。この他、例年、夜間に活動するボランティアが少なく運営に困難をきたすことから、今年度も17時～24時を中心に参加を募りました。その結果、遅い時間帯の運営に大きな貢献ができました。

こうした体験を経て、学生たちは、様々な立場の人たちがひとつの目的に向けて協力し、実行することの意義を実感しています。



## 参加者コメント

エコステーションで呼びかけている際に「頑張ってるね」などのお声をかけていただくことがあり、やりがいも感じました。また、このボランティアに参加したことで、日常生活でもリユースやゴミの分別を意識するようになりました。



文学部 歴史学科  
3年生 野邊青空

## 参加者コメント

祇園祭に初めて行きましたが、普段の街の景色と違い、沢山の店と賑わう人の多さに衝撃を受けました。しかし、賑わう祭りの裏では大量のゴミが出ています。一人ひとりがゴミ分別を徹底することで美しい街が保たれることを、ごみゼロ活動を通して身をもって学びました。



社会学部  
コミュニティデザイン学科  
2年生 福嶋速人

# 聞き取りを通じた 多世代交流と 社会調査プロジェクト (左京)



京都市左京区



2019年4月～2020年3月



文学部社会学科現代社会学コース  
社会調査実習 I・II



高井康弘・野村明宏・徳田 剛・渡邊拓也  
古谷伸子・阿部友香



文学部社会学科3年生9人

## プロジェクト概要

学生が実際に地域に出ていき、地域の人々や市民活動を担う人々と交流しながら、社会学的なフィールドワーク(社会調査)を実施することを通じて、地域社会および市民活動の現状と課題について理解を深め、あわせて、調査技法・倫理に関する応用実践力を身に付けることが目的です。

プロジェクト・パートナーである京都市左京東部・西部いきいき市民活動センター(以下、いきセンと記す)は、アートやイベントを通じて人を結び付けるさまざまな取り組みをおこなっています。いきセンが立地する地域は、若い人の流出と残った人の高齢化・孤立が進む

一方、外国からの方々の移住が顕著です。地域内外の人々の交流を活性化させ、閉鎖的であった地域を開くことで、地域課題を可視化し、さまざまな人の絆を創ることが状況の打開につながるという見通しで活動されています。前期は、学生・教員がいきセンの事業に参加することで、相互の関係を深めつつ、地域や事業の概要と課題を知ることにより重点を置いています。後期は、社会調査を企画・実行し、その成果を報告書にまとめ、いきセンのスタッフなど協力いただいた方々や地域の人々と共有します。



## 活動内容と成果

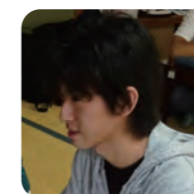
本年度は、いきセンの活動を担う多様な人々、すなわち、活動を企画する中心スタッフ・若手スタッフ・協力するアーティスト・地域内外から活動に参加する人、いきセンの施設を利用する人、それぞれがどのような経緯で関わり、どのような思いや意識をもっておられるのかについて理解を深めるべく、スタッフ・アーティスト・一般参加者への聞き取りを、学生が企画し実施しました。前期前半は、いきセンの主要スタッフ3名に学生たちが予備聞き取りをおこない

ました。前期後半は、いきセン企画の地域回想法における聞き取りスタッフ養成のためのコミュニケーション・ワーク(6回)に学生・教員が参加し、学生はそこでの経験をレポートにまとめました。夏期は、いきセンや地域との関係を深めるべく「復活! 錦林盆踊り大会」「ようせい夏まつり」に参加しました。後期はアーティスト・若手スタッフ・一般参加者計8名への聞き取り、および高齢者食堂での観察調査を実施し、調査成果を「社会調査実習報告書」にまとめました。



## 参加者コメント

いきいき市民センターや高齢者ふれあいサロンなど地域と密接に関わる施設の存在を知ることができました。イベントなどへの参加を通じて、参加者や施設職員など幅広い世代の方々と交流することができ、相手に自分の意見を伝える工夫など、コミュニケーション能力を見直す良い機会になりました。



文学部 社会学科  
3年生 岩本将樹

## 参加者コメント

現地に訪れて直接見聞きすることの重要性を感じました。座学だけではわからないことがたくさんあり、いきセンに訪問するたびに新しい発見がありました。一緒にコミュニケーションワークを受けたからこそ聞くことができたお話、夏祭りに参加して肌で感じた活気は、私にとって貴重な財産です。聞き取りや文字起こし等、苦勞することも多かったです。その分学べることが多く成長できたと思います。



文学部 社会学科  
3年生 田中友実








# 子ども・子育て支援プロジェクト

## プロジェクト概要

子育て世帯がたくさん暮らす住宅街という側面を持つ北区。京都市及び北区は子育て政策として、子育て中の保護者の不安や疑問を解消し、地域で孤立しないよう、地域の人たちとの仲間づくりや交流活動を推進しています。

大谷大学・大谷大学短期大学部では、こうした取り組みを将来、保育士や幼稚園教諭など、保育者を目指している学生たちの実践的な学びの機会—とくに近年保育者として必要とされている子育て支援・保護者支援の実践力を身につける学びの機会—として捉え、またそれが同時に地域貢献を実現する試みとして、子ども・子育てプロジェクトに取り組んでいます。

2019年度の具体的な活動としては、以下の3種の事業を展開しました。

-  大谷大学・京都市立楽只保育所、紫明幼稚園
-  2019年4月～2020年3月
-  大谷大学短期大学部幼児教育保育科  
専門科目 仏教保育演習、保育相談支援  
大谷大学教育学部教育学科幼児教育コース  
学科科目 おおたにキッズキャンパス演習Ⅲ
-  富岡量秀・小川晴美・川北典子
-  大谷大学短期大学部  
幼児教育保育科 2年生 70人  
大谷大学教育学部教育学科  
幼児教育コース 2年生 77人

- ①京都市の子育て支援事業である「いないいないばあ教室」を京都市子育て支援事業の北区の拠点園である京都市立楽只保育所と共同で年12回実施しました。
- ②北区の「地域子育て支援ステーション」である紫明幼稚園、のぞみ保育園と連携し、子育て相談や子育て講座・園庭開放等に取り組む「あかちゃんにこちゃんサロン」を年3回実施。また、大谷大学を会場に開催された「つながるフェスタ」における「はぐくみ広場」に、準備から片付けまでの開催者側の一員として参加し、またその交流会で普段の学びを生かして、ふれあい遊びなどを提案しともに楽しみました。
- ③近隣の保育園等と連携し、日常の園外活動の場として大谷大学の施設を活用、園児たちの遊び体験を学生がサポートする「近隣保育施設との連携事業」を申請のあった日時において実施しました。



## 活動内容と成果

2019年度においては、学内的には、大谷大学短期大学部幼児教育保育科だけではなく、大谷大学教育学部教育学科幼児教育コースの学生が参加することとなり、引き継ぎの年となりました。これまで2年制の最終学年で活動をしてきましたが、今後は4年制の2年目の学生たちが担うこととなります。4年制ではより専門性の高度化が要求されますが、中でも、現場で高まる子育て支援のニーズに応える保育者として、まず、子どもを育てている保護者の生の声に耳を傾け、その喜び、悩み、楽しさ、疑問などを知る機会、我が子に関わる保護者の姿に触れる機会は大変貴重なものとなりました。

また、保護者のみなさまにとっても、若い学生たちに話をすることで、子育ての喜びや子の愛しさなどを新たに感じる事ができ、双方にとって温かい時間となりました。それは、「いないいないばあ教室」の後、学生が手作りする「壁新聞」にも反映されており、大変好評を得ています。

次年度以降も、プロジェクトにおいて保護者のみなさまにとって、この時間が楽しく心豊かな時間となるよう、京都市や北区の先生方のご指導を仰ぎながら、学生とともに工夫を重ね、その活動を通して、保育者の卵である学生たちの人間としての、また保育者としての「根っこ」を育成していきたいと考えています。



## 参加者コメント

支援活動を通して、私たちが考える以上に世の中のお母さんは悩みながら子育てをしていることを知りました。あるお母さんに話しかけたとき、子育ての悩みや、嬉しかったことを話してくださいました。また、その場にいたほかのお母さんが自分の経験を話し解決策を話し合っていました。このような場があることで、子育て仲間を作る機会にもなり、孤立した子育てをなくすことにつながると感じました。



短期大学部  
幼児教育保育科  
2年生 富樹 天媛

## 参加者コメント

お母さん達とお話させていただいた際に、子育て支援のありがたさとともに、子育て支援の機会を増やしてもらいたい等の本音を知ることができました。そして、保育園等が担う役割をもっと模索していく必要性を感じました。将来、保育者として就職した際には、園や地域で子育て支援の場を設けるときも、ニーズに出来る限り近づけられるような環境を整え、また地域の人と関わる機会を増やすよう園、保護者、地域の人々と相談し、例えば園の行事にも積極的に参加してもらえようような活気あふれる園にしたいと思いました。



短期大学部  
幼児教育保育科  
2年生 山川 未羽

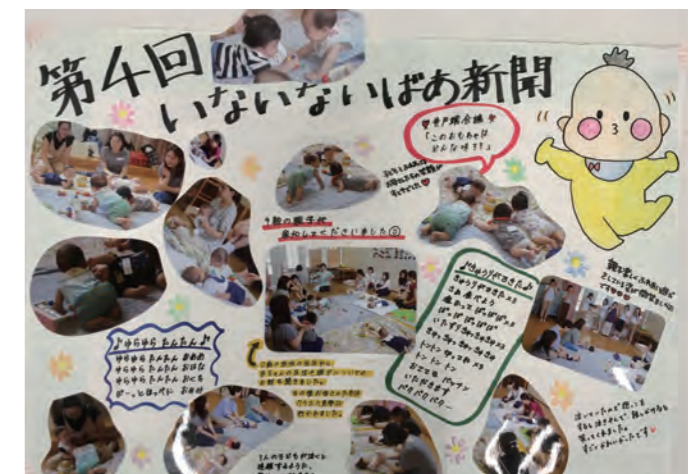
## 年間活動記録

赤ちゃんのいないいないばあ教室  
1クール(登録11組の親子)：6回実施  
2クール(登録13組の親子)：6回実施


あかちゃんにこちゃんサロン  
8月7日(水)10時半から11時半 於 紫明幼稚園  
12月4日(水)10時半から11時半 於 大谷大学4号館多目的室  
\*本年度 3回目を3月4日(水)10時半から11時半 於大谷大学4号館多目的室で計画していましたが、新型コロナウイルス感染防止のため中止となりました。

はぐくみ広場@つながるフェスタ2019  
11月29日(金)10時から11時半 大谷大学博覧館5階


近隣保育施設による大学施設利用  
(申請あるもののみ。上総幼稚園及びのぞみ保育園)  
0歳児・1歳児の来学 計7回





# 駅ナカアート 2019

 京都市営地下鉄・北大路駅(駅での展示)

 2018年11月15日～2019年6月30日

 情報表現学演習 III-1, IV-1,  
コミュニティデザイン演習 Ib-4

 松川節・倉光延行

 文学部人文情報学科3年生21人  
社会学部コミュニティデザイン学科1年生13人

## プロジェクト概要

「KYOTO 駅ナカアートプロジェクト」は京都市内の芸術系大学が中心となり、大学生のアート作品で地下鉄駅を装飾し、地下鉄を魅力的なものとして活性化することで、活力ある京都のまちづくりをめざすもので、2013年度に開始されました。大谷大学は、大学の地域連携の一環として2016年度より参加しており、今回は3度目です。



## 活動内容と成果

2018～19年度(2019年)の統一作品テーマは「あなたにとっての photogenic な駅」で、大谷大学は北大路駅構内が実施駅であったため、北大路駅構内を「大谷大学の入り口」、「和風あふれるもの」とする事、そして「駅構内を展示作品で埋め尽くす」という事を目標として制作、展示を行いました。大谷大学の入り口感を出すための展示では、大谷大学内にて活動されている書道部、写真部さんから作品を借用し、埋め尽くすように貼り付けました。和のテイストを出す作品展示では、提灯をメインとして展示し、提灯のデザインは柄や色のついた和紙を貼り付けました。駅に立ち寄った人が写真を撮ってしまいたくなるような展示となっています。

また、本事業の活動の様子を映像にまとめた「メイキング・プロモーション映像」を制作しました。

2019年2月7日にプロジェクト作品構想意見交換会に参加し、プレゼンを行いつつ、参加各大学と意見交換をしました。2月12日から2月28日まで、参加各大学を訪問して制作風景のメイキング取材・撮影を実施しました。3月18日にはジョイント・ミーティングに参加し、地下鉄烏丸線京都駅コトチカ広場にて作品発表と「メイキング・プロモーション映像」の上映を行いました。

3月18日～5月31日まで北大路駅にて作品展示、メンテナンス、追加取材(市内各地にて撮影ロケ)を行い、6月11日にはプロジェクトアフターミーティング(反省会)に参加しました。



## 参加者コメント

今年の駅ナカアートは、様々な部活や団体様と提携を組み、それぞれの中で作成された作品を駅構内に展示しました。駅を利用する人々が作品を見るように展示方法には特に気をつけ、特に作品が落下等しないように管理しました。



文学部 人文情報学科  
4年生 小島琢斗

## 参加者コメント

私たち松川ゼミが北大路駅を担当するのは今年が初めてでした。そこでお祭り気分盛り上げたいと思い、様々な展示を企画しました。展示作品に多くの好評をいただき、このような経験をいただいたことに深く感謝します。



文学部 人文情報学科  
4年生 深見和希






# 網野町海浜漂着 プラスチックの 調査・清掃活動

## プロジェクト概要

本プロジェクト発足のきっかけは、社会学部コミュニティデザイン学科の第2学年ゼミ生がブレイン・ストーミングで今年度の調査・研究課題を考えたことでした。結果として、「山より海がいい」ということになり、いざ行く場所を考えると、「紀伊半島はかなり遠く、むしろ丹後半島の方が近い」ということになったのです。そういえば鈴木との知り合いに網野町在住の地質調査技師の方(榎本 晋氏)がいることを思いだし、協力を得やすいことから網野町に決まりました。

網野町について調べていると、琴引浜で海岸清掃の先進的取り組みがなされてきたこと、そして漂着ゴミについて長年調査してきた先達(安松貞夫氏)がいることが分かりました。日本海側の海岸漂着ゴミ問題は、かねてからの懸案であり、どう解決すべきか、基礎調査を基に考えてみることにしました。



-  京丹後市網野町の海岸(一部久美浜町を含む)
-  2019年9月1日~7日
-  コミュニティデザイン演習 IIa-5・IIb-5、  
プロジェクト研究実践 I-5・II-5
-  鈴木寿志
-  社会学部コミュニティデザイン学科 2年生 10人

鈴木ゼミは今年度から新たに発足したため、ゼミ生の人数や具体的活動が読めず、前年度申請の予算額ではなかなか思うように活動できないことが分かりました。しかし、網野市民局や水之江区长さんの協力を得て、どうにか格安で合宿を行うことができました。宿泊所の水之江区コミュニティセンターでは、自分たちで食事を作ったり、洗濯をするなど自ら行動しなければなりません。もちろん現地調査も暑い中汗びっしょりになりながらこなしました。そして中間発表では地元住民の方々とも交流しました。これらの実践的経験を通して、学生たちは大きく成長したと思います。

## 活動内容と成果

2019年9月1日~7日の6泊7日の日程で網野町の海岸において調査活動を実施しました。ゼミ生10名が2名ずつ5つの班に分かれてそれぞれ以下の課題に取り組みました。1)海浜漂着物、2)海浜砂中のマイクロプラスチック、3)海中浮遊マイクロプラスチック、4)魚内臓中のマイクロプラスチック、5)網野町の自然と文化。その結果、次のようなことが明らかになりました。

海浜漂着物にはハングルの書かれた漁業用の浮きや20リットルの薬品容器がたくさん流れ着いていました。国籍調査にあたっては、小浜のマブ川河口にて文字情報の残されていたペットボトル・缶・瓶類、洗剤などの薬品容器を中心に調査しました。その結果、これらを合わせた国別個数は日本が最も多く、次いで中国、韓国という結果でした。意外にも日本のものが多く漂着していることが分かりましたが、中国や韓国など日本海対岸に由来するものも多く含まれます。海浜砂中には大きさ5mm以下のマイクロプラスチックが

かなりの頻度で含まれていました。海中浮遊のマイクロプラスチックをプランクトンネットで調べましたが、浮遊密度が低くなかなか検出できませんでした。しかし、琴引浜や漁港においていくつかの浮遊マイクロプラスチックが検出されました。魚中のマイクロプラスチックについては、アジ2匹の内臓から小さな繊維片が検出されました。

合宿では中間発表を行い、調査内容を説明するとともに、地元住民の方々から意見を伺うことができました。マブ川河口の清掃活動では、280kgのゴミを回収することができました。活動中、新聞とテレビの取材を受け、それぞれ新聞記事(令和元年9月2日付京都新聞朝刊)とニュース番組(令和元年9月16日放送KBS京都「newsフェイス」)に取り上げられました。また網野市民局の広報記事(「あみの四季彩」第8号)にも掲載されました。海岸漂着ゴミとマイクロプラスチック問題について、社会の関心の高さをうかがわせるとともに、調査結果からどのような支援・環境改善活動が可能か、来年度以降模索していきます。



## 参加者コメント

魚の内臓を調べるにあたり、現地では魚を釣り内臓を取り出しました。大学に戻ってからは内臓を腐らせてプラスチック片を探しましたが、とても臭かったです。現地では、さばいた魚を調理するのが楽しく、みなでおいしくいただきました。



社会学部  
コミュニティデザイン学科  
2年生 東 亮太

## 参加者コメント

海岸では普段清掃されていない浜の漂着ゴミを調べました。日本のゴミはもとより海外からのゴミがとても多いのに驚きました。大きいものから小さいものまで大量のゴミの山。これらの清掃活動を行いました。暑い中大変でした。そして普段から清掃を行っておられる地元の方々の努力や大変さ、また砂浜を綺麗に保ちたいという地元の方々の思いを感じました。



社会学部  
コミュニティデザイン学科  
2年生 大仲健太

# 伝記作成 プロジェクト

## プロジェクト概要

フィールドワークの一手法であるインタビュー法を通じて、人の生活する動的エリアとしての「地域」を時間軸と空間軸の両面から理解し、記録し、まとめることによって、地域アプローチの手法の実際とインタビュー、記録、グループでのまとめ、アウトプットについて学ぶものです。

地域にお住まいの方々にインタビューを行うことで、インタビュー法を学ぶだけでなく、

- ・地域理解(地域の特性や現状)
- ・地域課題
- ・地域課題に対する住民活動の経過や現状を把握する力も養うことができます。

コミュニティデザイン学科は、1年生後期より、地域活性化、情報、社会福祉の3つの専門分野に分かれて、演習(ゼミ)や講義が進められていきます。いずれのコースに進むとしても、地域というフィールドに出て、地域住民からニーズ等の聞き取りが欠かせません。地域に出むき、地域住民と共同して活動するための基礎的な力を付けるため、入学初年度から本プロジェクトを実施しています。



## 参加者コメント

初めてこのようなインタビューを経験しました。人の人生について、ここまで掘り下げて聞いたことがなかったので、しっかりと話を聞き、それを丁寧にまとめるという良い経験ができました。反対に、聞き取った内容を文章化することが難しかったです。うまくまとめられるかが心配でしたが、伝記が完成した時は嬉しかったです。



社会学部  
コミュニティデザイン学科  
1年生 梓谷 大輔

📍 京都市北区

📅 2019年4月～7月

👤 社会学部コミュニティデザイン学科  
プロジェクト研究入門Ⅰ、コミュニティデザイン演習Ⅰ

👤 志藤修史、赤澤清孝、大原ゆい、松川節、鈴木寿志、平尾良治、中野加奈子、鎌谷勇宏、野村実

👤 社会学部コミュニティデザイン学科1年生 114人

## 活動内容と成果

2019年度はコミュニティデザイン学科の1年生114名が参加しました。学生を8クラス(1クラス13～15名)に分け、さらに各クラスを3～4チーム(1チーム4～5名)に分けてインタビューを行いました。大谷大学近隣で活躍されている、社会福祉協議会、幼稚園、高齢福祉事業所、NPO、青少年センター、近隣店舗など合計28名の方々にインタビューのご協力をいただきました。

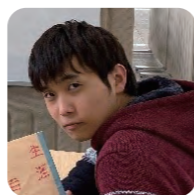
各チームで、①インタビュー先にアポイントをとる、②インタビュー内容を考える、③インタビューを実施し記録をとる、④記録をもとに構成を考える、⑤聞き取り不足分の追加インタビューを考える、⑥原稿を執筆する、⑦校正作業と製本作業を行う、といったプロセスを経て伝記を完成させました。そして最後に完成した伝記をインタビュー先の方々に手渡しし、感想と謝意を伝えました。

本プロジェクトを通じて様々な力を養成できました。コミュニケーション能力は当然のことながら、インタビュー内容や全体構成を考える力、パソコンを用いて冊子を作成する力、さらにチームマネジメント力などが備わったと感じています。これらの力は、この後の大学生活や卒業後の社会人生活において、大きな助けになるでしょう。



## 参加者コメント

インタビューを担当しましたが、はじめはとても緊張しました。先方のご配慮もあり徐々にリラックスすることができました。話を聞くことで、働くことの大変さや、自分の付きたい仕事に就くことの努力の重要性を学ぶことができました。働くことだけでなく、生きがい(趣味など)を持つことが、自分の人生の支えになるということが最も心に残っています。



社会学部  
コミュニティデザイン学科  
1年生 山田 一哉

# 南丹市美山町 平屋地区と 学生との交流活動

## プロジェクト概要

本プロジェクトでは、過疎高齢化の進む美山町の生活実態と課題および住民活動を学ぶ、そしてグループ活動を通じて学習研究を深めるということを目的に、平屋地区地域福祉推進協議会、南丹市社会福祉協議会の皆様と共に取り組んでいます。学生による高齢者宅等への訪問活動や、平屋地区の高齢者との交流を目的とした「ふれあいカフェ」の開催、2018年度から実施している高齢者の移動・交通に関する調査など、プロジェクト内でも複数のテーマに分かれて活動を行っています。

これまでの平屋地区における活動では、ふれあいカフェにおいて、学生有志による「音楽隊」を結成し、一緒に歌って楽しめる音楽を披露しながら楽しい時間を共有しました。そのほかにも、暮らしの困りごと調査を通じて地域の皆さんから草刈りや雪かき、農作業などの頼みごとや、将来への不安や日頃の話し相手が少ないことを伺い、それぞれのお宅へ訪問して交流や生活のお手伝いを行ってきました。

また、地域活動や聞き取り調査をもとに、平屋地区地域福祉協議会や住民の皆さんへの調査成果のフィードバックを行ってきました。こうした成果の一つとして、外出支援策の一つとして、住民有志と社会福祉協議会の協力による「おでかけツアー」が2019年10月から開始されることとなり、住民の皆さんの生活がますます充実していくことが期待されます。

本プロジェクトは、京都府「1まち1キャンパス事業」の助成を受けて実施しました。



## 参加者コメント

今回お宿に参加して地域の中での問題や、地域住民の皆さんの現状を知ることが出来ました。実際に現地に行くことができなかったことを経験することができました。私は主に地域の交通手段について調査しましたが、フィールドワークをするだけではなく、交流を深めることで現地の皆さんの優しさに触れることができました。



社会学部  
コミュニティデザイン学科  
1年生 八木 翔伍

📍 京都府南丹市美山町平屋地区

📅 2019年10月19日～20日

👤 文学部社会学部地域政策学コース専門科目  
社会学部コミュニティデザイン学科専門科目

👤 志藤修史・野村実・山田大地(地域連携アドバイザー)

👤 文学部社会学部  
3年生・4年生 4人(任意参加2人含む)  
社会学部コミュニティデザイン学科  
1年生・2年生 27人

## 活動内容と成果


2019年度は、1泊2日の宿泊型プロジェクトとして実施し、学生によるサロンの運営や高齢者宅への訪問・困り事解決のお手伝い・交流を行いました。そうしたことを通じて、平屋地域福祉推進協議会が進めている、地元の人同士による支え合いを地区ぐるみで行っていくことによる「年を重ねても地元で暮らし続けられる地域づくり」に学ぶことを目標に取り組みました。また、移動・外出手段の減少など地域の切実な課題についての実態を明らかにすることも狙いとして実施しました。


1日目は「ふれあいカフェ」実行チームと美山町鶴ヶ岡地区「鶴ヶ岡振興会」への調査チームで分かれ、それぞれ住民の方々に協力していただきながら、カフェの準備や開催、フィールドワークを行いました。2日目の訪問活動では、平屋地区大内地域の清掃活動への参加と、一人暮らしの高齢者へのご自宅訪問をさせていただきました。ご自宅訪問では、普段は隣近所に頼みづらい草引きや重い荷物を運ぶなどのお手伝いを、大内地域では、山道や側溝などの掃除のお手伝いをしました。

手伝いだけではなく、日常生活でどのような困りごとや悩みごとがあるのかについてお話を伺ったり、地域の清掃活動に参加させていただきながら、平屋地区の歴史や地域課題について話していただきました。特に大内地域では、移動・交通に関するアンケート調査を行い、小さなお子さんから高齢者の方まで、幅広い年齢層の住民の皆さんから、普段の移動や交通の課題に関する声をいただきました。





# 京都府北部福祉 フィールドワーク

 京都府福知山市

 ①2019年9月11日～13日  
②2020年2月25日～27日

 有志による課外活動として実施

 中野加奈子

 ①文学部社会学科 3年生 3人  
社会学部コミュニティデザイン学科 2年生 1人  
社会学部コミュニティデザイン学科 1年生 2人  
②社会学部コミュニティデザイン学科 1年生 4人



## プロジェクト概要

京都府北部地域で多様な地域実践を展開している自治体（福知山市）で、地域を基盤としたソーシャルワークの実際を学ぶことを目的としたフィールドワークです。

本年度は、福知山市にある社会福祉法人ふくちやま福祉会を拠点に、主に障害のある人々の地域生活を支える実践に焦点を当て、障害当事者との交流や、職員との意見交換・フィールドワークを実施しました。具体的には、日中支援として障害者の就労支援を見学し、具体的な作業内容を学びました。また居宅支援では、グループホームでの生活支援の実際や、地域生活支援センターの役割などを、見学や意見交換などを通して体験しました。それらの体験を通して、ミクロ・メゾ・マクロレベルのソーシャルワーク理論が具体的な実践へと活かされている様子を学ぶことができました。

## 活動内容と成果

①の日程では、正課での実習（社会福祉援助技術現場実習）を経験した3年生を中心に、学年を超えた縦のつながりを形成しながら、学生主体で学ぶことができました。特に3年生は、実習を通して各自の問題関心に沿ってソーシャルワーカーのロールモデルを描くことにつながったと考えられます。2年生は昨年からの継続した参加となりましたが、同じ北部でも地域性が異なることや、障害者福祉の特徴を理解することができました。1年生は初めての参加でしたが、障がいを持つ人への支援を学ぶだけでなく、先輩たちの学ぶ姿から、ソーシャルワークを学ぶことの意義を感じ取っていたように思われます。

また、日常的に出会う機会が少ない知的障害者との交流を通して、学生たちは多くのことを学ぶことができました。特に、知的障害と言われる「障害」をもつ人々は一一人ひとりに個性があり「障害」という二文字でまとめられるものではないということや、その人の強みを生かしながら生き生きと地域生活を送っている様子から、ノーマライゼーションや地域共生の姿を理解することにつながったといえるでしょう。

さらに、職員との交流を通して、人が人を支援するとはどういうことなのか、権利を守るとはどういうことなのかを考え、自分の将来像としてのソーシャルワーカー像を描くことにつながりました。

## 参加者コメント

それぞれの事業所で利用者の主体性を重視し、出来ること、やりたいことを最大限実現できるように支援されていました。また、事業所などを住宅街や駅前に建てることにより、地域との関わりを増やすことや、障害について理解を得られるような活動を大切にしていることを学ぶことができました。



文学部社会学科  
3年生 榎屋 豪仁


## 参加者コメント


想像していた「福祉」とは違い、楽しさもあれば大変な時もある、なにより障害者の方を「仲間」と呼んでいて障害がない方と同じように働いている姿を見て、とても良い環境だと感じました。「福祉」のイメージがもっと良くなった。このフィールドワークに参加できて良かったです。




社会学部  
コミュニティデザイン学科  
1年生 行徳 元美


# ニコニコ北っ子 「北区こどものまち」

 京都市北区

 2020年1月19日～2月24日(こども会議)  
本番: 2月29日・3月1日(両日とも中止)

 有志による課外活動

 地域連携室

 文学部 教育心理学科 4年生 10人 / 3年生 10人  
社会学部 コミュニティデザイン学科 1年生 2人

## プロジェクト概要

北区未来につながる区民会議・北区役所が主催して本学を会場とするイベント「ニコニコ北っ子 北区こどものまち」(以下「こどものまち」)に、学生有志がチャイルド・ファシリテーター(CF)、および SNS による情報発信担当として参加しました。

「こどものまち」は、本学5号館全体を会場に、仮想の「まち」を子どもたちがつくることを通じて、仕事のおもしろさや税・行政などの役割、経済といった「まちの仕組み」を学ぶ体験イベントです。こどもスタッフと呼ばれる30人の子どもたちが5回にわたり会議と準備を重ね、「ドキドキ」から名付けられた「ドキ」をまちの通貨として、まちがハッピーになるための仕事・サービスや仕組みを自分たちで考えます。そして、2日間にわたり当日参加の150人もの子どもたちを迎え、ともに仮想のまちを作り上げます。



## 参加者コメント

こどものまちが中止になってしまい残念でしたが、5回のこども会議の中で「こどもたちが主体になった姿」を真近で見ることができて大変良い経験になりました。こどもたちの成長を促すために、支援する側が「待つ、見守る」ことの大切さを学ぶことができて良かったです。



文学部 教育心理学科  
3年生 山崎夏碧

## 活動内容と成果

本イベントにおいて学生は、5回にわたった「こども会議」においてこどもスタッフが、「ハッピーなまち」をつくるにはどのような仕組みがあればよいかを話し合う際の意見の引き出し役を務めました。教育心理学科の学生を中心に、会議冒頭に毎回異なるワークショップで子ども同士を打ち解けさせ、通う学校や学年の異なる子どもの意見・主体性を尊重しながら、子どものアイデアや想いを引き出し反映したお店や行政ブースを手作りし、まちを形にしながら子どもたちの関係性や育ちを見守る運営を行いました。また、社会学部・赤澤ゼミから参加した学生チームは、「こども会議」の各回の様子を SNS (facebook・Instagram・twitter) でリアルタイムで発信しました。

本番当日、CFは各ブースにアシスタントとして随伴し、子ども同士のサポートを行う予定でしたが、開催日前後に流行していた新型コロナウイルス感染症の蔓延が危惧されたため、こども会議を終了した時点で本番の開催はやむなく中止となりました。しかし、CFは中止となった後も自身が担当するはずだったブースのこどもたちにメッセージカードを送るなど、こどもたちのがんばりが無駄とならないよう工夫を凝らしていました。



こども会議の  
レポートはこちらから!



## 参加者コメント

私は、初めてこどものまちに CF として参加させていただきました。子供たちは、会議を重ねるごとに自分たちで話し合い協力して、まちのしくみやお金の流れを考えて、自分たちのお店を完成させていくととても感銘を受けました。



文学部 教育心理学科  
3年生 清村斗希

# 学まち連携大学 促進事業に関する 取り組み

## 概要

大谷大学では、従前より短期大学部幼児保育科を中心に北区と連携し、大学施設なども活用して地域の子育て支援の取り組みを進めてきました。

2016年に(公財)大学コンソーシアム京都および京都市による、大学の地域連携事業とカリキュラムとの連動・全学化を補助する「学まち連携大学事業」の公募があり、本学も「北区・北大路を中心とした大学・地域連携事業」として申請しましたところ、採択されました。

これに基づき、大学の位置する烏丸北大路地域において、地域住民やNPO、地元企業、商店などの事業組織と大学が連携し、宗教・歴史・国際文化・教育・保育・情報メディアなどのさまざまな専門性を有する学生・教員が子育て支援や地域の発信力を高める取り組み、あるいは地域の課題を解決・改善するような取り組みへと参画することを目指して各取り組みを展開してまいりました。

本事業の採択最終年度である本年度も、学生・教職員にとって学び暮らすまちである烏丸北大路エリアでのこれらの活動を通じて、  
①研究成果の社会還元、②実践活動を通じた学生の学びの充実  
③地域貢献が両立・実現できるよう、取り組んでまいりました。

## プロジェクト活動の推進

2019年度も、「コミュニティメディアプロジェクト」、「祇園祭ごみゼロ大作戦プロジェクト」「子ども・子育て支援プロジェクト」を本事業の枠組みの中で中心的に展開いたしました。各プロジェクトの成果は、プロジェクト別のページをご覧ください。



京都市北区・左京区・下京区など

2019年4月1日～2020年3月31日

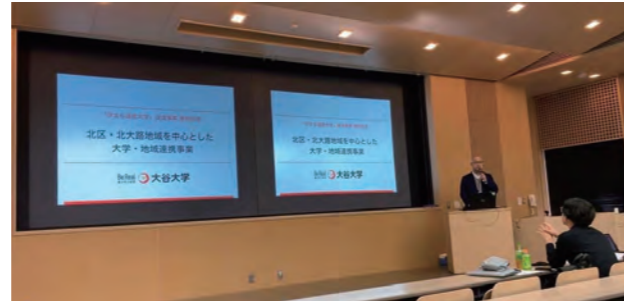
大谷大学・大谷大学短期大学部

地域連携室

大谷大学・大谷大学短期大学部

## 学まちサミットでの発表

2019年12月1日にキャンパスプラザ京都で開催された「2019年度大学・地域連携サミット『大学・学生×地域』のさらなる“極”へ～「大学のまち京都・学生のまち京都」ならではのまちづくり～」にて取り組み内容を報告し、「学まち連携大学」促進事業に採択されている6大学の方々と共に成果と今後の課題を議論するパネルディスカッションにも登壇いたしました。その後、学生とともに様々な連携事例が紹介されたポスターセッションにも参加いたしました。



# 情報発信

## 大谷大学オフィシャルWebサイト 地域連携室(コミュ・ラボ)



地域連携室及び地域連携プロジェクトに関する基本情報をご覧ください。また、「大谷大学地域連携室事業報告書」のバックナンバーもダウンロードできます。



## 大谷大学地域連携室オフィシャル Facebook



地域連携プロジェクトの日々の活動の様子や地域連携室主催事業のお知らせなどを発信しています。



instagram  
twitterでも  
情報発信中!

## お問合せ

### ◆本報告書に掲載するプロジェクトに関することや 地域連携に関するご相談などについて

大谷大学響流館1階 大谷大学地域連携室

〒603-8143 京都市北区小山上総町 大谷大学響流館1階

Tel:075-411-8015 Fax:075-411-8162

mail:commu-labo@otani.ac.jp

開室時間 月曜日～金曜日 9時～11時30分/12時30分～17時  
\*事務休止日を除く

### ◆ボランティア募集の学内掲示に関するご相談について

大谷大学慶間館1階 大谷大学学生支援課

Tel:075-411-8119

開室時間 月曜日～金曜日 9時～13時/14時～17時  
\*事務休止日を除く

ボランティアの内容、実施期間などによって、掲示をお断りする場合があります。

地域連携室や地域連携プロジェクトの日々の活動の様子を発信しています。

## コミュニティメディアプロジェクト

### ◆コミュニティラジオ番組「大谷大学ハッピーアワー」

FM87.0Mhz 毎週19時～放送中です。聴取エリア、聴取方法の詳細はRADIO mix KYOTOのWebサイトをご参照ください。放送に合わせて、「大谷大学ハッピーアワー」オフィシャルFacebook及びTwitterでも情報発信中です。

RADIO mix KYOTOの番組ページから「大谷大学ハッピーアワー」のバックナンバーをお聞きいただけます。お聞きになりたい放送日のタイトルを選択し、開いたページから「MP3」を再生してください。



### ◆Webサイト・フリーペーパー「キタキタ!」

キタ区キタ大路のリトルプレスとして、ステキなお店、地域イベントなどを取材・紹介しています。Webサイトはスマホに対応しています。烏丸北大路へお出かけの際はぜひ活用ください。フリーペーパー「キタキタ!」は、大谷大学響流館1階地域連携室にて配布しているほか、北区役所、北区内の飲食店などでも配布しています。その他配布場所はWebサイト「キタキタ!」にてご確認ください。配布にご協力いただける方を募集中です。ご協力いただける方は、地域連携室までご連絡いただけますよう、お願いいたします。

